



平成 28 年 9 月 23 日

ハーグ国立文書館所蔵平戸オランダ商館文書の調査に関する説明

日文研では、2016年4月1日に人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「日本関連在外資料調査研究・活用」の一環として、「ハーグ国立文書館所蔵平戸オランダ商館文書調査研究・活用」プロジェクトを開始した。本プロジェクトは、江戸初期における対外関係研究において、情報の宝庫でありながら、難解な文書であるため、研究がほとんど行われてこなかった平戸オランダ商館文書のうち、1609年から1633年の書簡や決議録等について翻刻や日本語訳を行い、それらの情報を当該年代の基礎的かつ補完的な研究資料として国内外の様々な分野の研究者に提供することを目的としている。

当該史料の調査の背景

○1609年に設立された平戸オランダ商館は、1641年に長崎へ移転されるまで、オランダ東インド会社の日本における外交・貿易活動の拠点であった。平戸オランダ商館では様々な文書が作成され、公務日記を初め、送受信書簡、決議録、仕訳帳、送り状、注文書、覚書等が現存している。

○1633年～1641年分の平戸オランダ商館公務日記は、以下の通り、すでに和訳されている。

*永積洋子『平戸オランダ商館の日記』（第一輯～第四輯）、岩波書店、1969-1970年。

*東京大学史料編纂所編『オランダ商館長日記』（訳文編之一上～訳文編四下）、1974-1984年。

なお、1633年以前の公務日記は存在していない。また、1633年以前の時期の各種の文書について行われた研究は少ない。

○1633年以前の平戸オランダ商館文書の研究として以下のものが挙げられる。

*東京帝国大学文学部史料編纂掛編『大日本史料』第十二編、1920年代。

*東京大学史料編纂所編『日本関係海外史料目録』1963年。

*永積洋子『平戸オランダ商館日記—近世外交の確立—』講談社、2000年。

『大日本史料』においては、大坂の陣関連記述を含む平戸オランダ商館送受信書簡の部分的な和訳がある。『日本関係海外史料目録』には、平戸オランダ商館文書を網羅的に列挙した目録が所収されている。『平戸オランダ商館日記—近世外交の確立—』では、日記以前の文書も研究対象となっているが、大坂の陣関連記述への言及はない。

○1633年以前の文書、とりわけ書簡についての研究が少ない理由としては、これまでの研究調査は主に日記に集中していたことや、日記よりも書簡の内容の方がより難解



であることが挙げられる。

ライデン大学との連携について

ライデン大学文学部歴史研究科ヨス・ホマンズ教授 (Leiden University, Humanities, Institute for History, Prof. dr. J. L. L. Gommans、近世アジア史) より日文研のフレデリック・クレインズ准教授 (日欧交流史) に対して、1633年以前の平戸オランダ商館文書の共同研究の提案が持ち掛けられ、2014年から共同で調査を開始することになった。本調査は東インド会社文書を専門とする同研究科のシンシア・フィアレ (Cynthia Vialle) 研究員および日文研のクレインズ准教授によって行われている。

ライデン大学文学部歴史学研究科は、東インド会社文書の分野における最も重要な研究拠点となっている。一方、日文研は創立以来日本関係欧文図書 (外書) の収集・研究に注力してきた。この両機関のそれぞれの強みを生かし、日文研とライデン大学は1999年に海外シンポジウムを、2010年には海外研究交流シンポジウムを共催し、これまで活発な学術交流を行ってきた。このようにして培ってきた両機関の相互補完的連携関係により、平戸オランダ商館文書の本格的な調査・研究が可能となった。

この共同研究が、2015年度に「ハーグ国立文書館所蔵平戸オランダ商館文書の調査研究・活用」として、人間文化研究機構のネットワーク型基幹研究プロジェクト「日本関連在外資料調査研究・活用」に採用され、本プロジェクトを効果的に推進するために日文研はライデン大学文学部とハーグ国立文書館との間に学術交流協定を結ぶ予定である。

本調査のこれまでの成果

○日文研はライデン大学と共同で、平戸商館の往復書簡の目録調査を行った。その結果、以下の4つの史料群 (すべてハーグ国立文書館所蔵) の中で524通の書簡 (約2000頁) の存在を同定した。

- (1) オランダ東インド会社文書 (VOC)
- (2) 日本のオランダ商館文書 (NFJ)
- (3) 個人蔵文書
- (4) 新たに購入された文書

○書簡は主に次の通りに分類できる。

- (1) 平戸オランダ商館長と東インド会社総督やオランダ本部との往復書簡
- (2) 平戸オランダ商館長と日本国内の商務員との往復書簡

- (3) 平戸オランダ商館長とアジアの他の商館長との往復書簡
 - (4) 将軍、幕府高官や平戸藩主への書簡
- 現在、これらすべての書簡の翻刻・和訳作業を進めている。

往復書簡の内容

○書簡には、主に貿易取引や日々の業務についての情報が多いが、その他に商館員の日本についての見聞録や日本の商人および幕府の役人とのやり取り、将軍や幕府高官への贈物などについての情報も掲載され、平戸オランダ商館文書にある情報は、当時の日本側史料を補完することが期待できる。

大坂の陣関連記述について

○大坂の陣関連記述は、当時の平戸オランダ商館の写本「受信書簡 1614年8月4日から1616年12月29日」と題する受信書簡綴り（ハーグ国立文書館所蔵 NFJ276）に所収されている。この写本は、平戸オランダ商館長が受信した書簡を商館付の書記が書き写したものであると推測される。

○現在のところ、大坂の陣関連記述がある書簡としては、メルヒヨル・ファン・サントフォールト、エルベルト・ワウテルセン、マテイス・テン・ブルッケの書簡10通を確認している。その他に、ヤン・ヨーステン・ローデンステインの書簡やジャックス・スペックスおよびエルベルト・ワウテルセンの決議録にも間接的な記述が見られる。

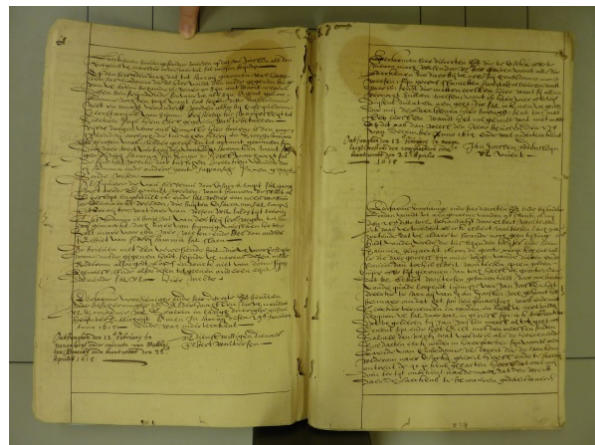
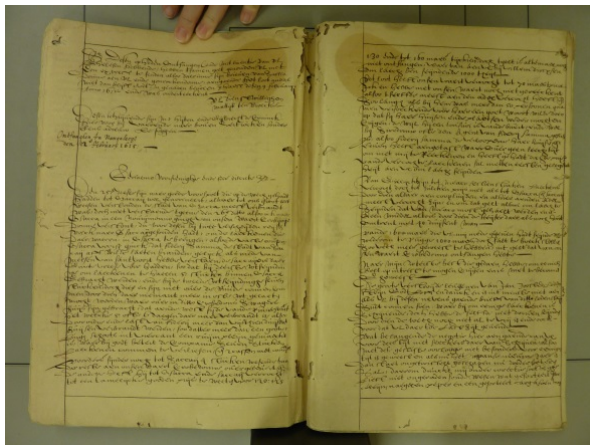
○これらの書簡は、大坂の陣の前後に堺、大坂、京都、室津（現兵庫県たつの市）から発信されており、オランダ人が当時各地で見聞したことを伝えている。そこには、不穏な状況下での民衆の恐怖や混乱が克明に記録されている。大坂の陣について庶民が残した史料が乏しい中で、庶民の視点から見た記録として貴重であるといえる。

○これらの書簡には、家康や秀頼の動向などについての情報も含まれており、今回の一連の報道において新聞各紙では、特に豊臣滅亡直前の裏切りや放火についての記述が大きく取り上げられた。しかしながら、この情報は、商議員ワウテルセンが京都にいた時に、恐らく取引先の商人から得たものであるもので、あくまで当時の噂として書き留められたものであり、歴史研究上においては、厳格な史料批判を行い、その信憑性について疑うべき余地がある。

○『徳川実紀』に、料理人が寝返って火をつけたという記述があることからすると、ワウテルセンの書簡の記述に信憑性がない訳でもないが、この事柄に関しては、ワウテルセンの書簡は二次史料であるため、歴史事実として認める訳にはいかない。しかし、その一方では、一般庶民が見た戦乱を知る上では、この書簡は一級史料であるといえる。

今後の予定

○今回報道関係者に提示した、大坂の陣関連記述の和訳は、未定稿の段階のものである。17世紀初期のオランダ語の書簡の内容が難解で、様々な解釈ができ得るため、今後、一語一語の意味を日本側史料と比較分析しながら、慎重に吟味・検証する作業が必要である和訳はまだ開始したばかりの段階であり、今後、和訳や検証等の作業を順次に進めていき、大坂の陣前後の時期の書簡の和訳部分の出版は、2018年度内を目指している。



エルベルト・ワウテルセンより〔平戸商館長宛〕書簡、堺、1615年1月29日付。
(ハーグ国立文書館 Nationaal Archief 所蔵)